
質問攻めの灰原さん

サイザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

質問攻めの灰原さん

【Nコード】

N0114A

【作者名】

サイザー

【あらすじ】

今日に限ってやたらと先生に質問される灰原難なく答えていくが・

1 時間目

質問攻めの灰原さん
作…サイザー

1 時間目

質問攻めの灰原さん

オレは中学生探偵江戸川コナン。黒の組織は7年前にぶっ潰し、蘭には工藤新一は死んだのだと連絡をいれ、今は江戸川コナンの姿として灰原と中学生生活を送っている

1 時間目は国語だ。小学1年生の国語もかなりつまらなかったが、中学生の国語も24歳のオレにしてみればそうとうつまらない。同じく24歳の灰原もつまらなそうにしている。

「ええゝつまり、未然形・連用形・終止形・連体形・仮定形・命令形に分けられていて……」

先生が教科書を読みながら意味を説明している。灰原は相変わらず教科書に小説を挟

んで読んでいる

「ええ、つまり未然形は——ん・・・？」

先生は灰原が小説を読んでいることに気づいた

「お、おい灰原、先生こっち見てんぞ」

「あっそう」

灰原は小説から目を離そうとはしない

「いいかげんやめとけて・・・」

「灰原さん」

先生が灰原を指した

（ああ、やっぱり・・・やめとけて言ったのに・・・）

「で、ここはどうなるの？先生の話を聞いていれば判りますよ」

（はあ、ん・・・そうきたか・・・まあ灰原にはきかねえな・・・）

灰原が静かに口を開いた

「つまり、＜散らなむ＞の＜なむ＞は、ラ行四段活用の未然形に接続している事から、

これは＜あつらえ望む＞を表す終助詞であり、＜散ってくれよ＞の意であることがわかる。

これにたいして＜散りなむ＞は連用形に続く＜なむ＞であるから・・・」

習ってもない事をペラペラ言う灰原をクラス全員が怪訝な顔で見ている。

「おいおい灰原、そのへんでやめとけ・・・」

「ところで、この両者はたまたま未然、連用の形が違う四段活用の動詞に・・・」

（おい、無視かよ・・・）

「例えば上一段のように未然・連用同型の場合には、注意が必要である……また」

「も、もういいわよ、そこまで聞いてないわ。あなたが授業する気？」

「いえ……」

スッと静かに席に座ると、また小説に目を通した

(こりねえ奴……)

キーンコーンカーンコーン

1時間目「国語」

終

「おい灰原、おめえがあんなに目立つ事をするとは珍しいじゃねーか」

いまだに小説を読んでいる灰原に話かけた

「まあね、これは教師と私のバトルロワイアルですもの」

「はあ？」

クスリと灰原が笑った頃にチャイムが鳴った

2時間目は英語か……。嫌な予感がするぜ。

〜2時間目に続く〜

あとがき

あまかめぐみ

こんにちわ天使恵です。私は基本的に学校ものの小説が好きでそういう小説ばかりかいてます。さてさて今回の「質問攻めの灰原さん」は

ちゃんと(↑?) 6時間目まであります。まあ、哀ちゃんならどんな質問が飛んで

こようが、大丈夫！！・・・だと思いませんか？まあ、気になる人は続きを
お読みください

戻る

[illegible]

あとかき

こんにちはサイザーです。私は基本的に学校ものの小説が好きでそういう小説ばかりかいてます。さてさて今回の「質問攻めの灰原さん」は

ちゃんと（↑？）6時間目まであります。まあ、哀ちゃんならどんな質問が飛んで

こようが、大丈夫!! だと思えますか? まあ、気になる人は続きを

お読みください

[illegible]

TOP

—小説家になろう—

2時間目

質問攻めの灰原さん（2時間目）

今は1時間目と2時間目の10分間の休憩の時間。オレはさっき言っていた

灰原の言葉を思い出していた

『だってこれは、教師と私のバトルロワイアルですもの』

（はあゝ・・・んだよそれ。バトルロワイアルだあ？殺し合いでもすんのか？）

などと、色々な想像を巡らせて自問自答していた。と、その時休み時間の1分前に

先生が入ってきた

（あれ？村上（英語の先生）じゃねえな・・・）

「おい、早く席につけ！たった今村上先生が事故にあわれた！先生達はこれから

病院に行ってくるから、このプリントで自習してろよ！」

と言って素早くプリントを配り終わると、走って廊下に出た。

「交通事故ね・・・」

プリントを受け取った灰原が突然言い出した。ザワザワしている教室なのでオレは聞き取れなかった

「ああ？」

「トラックとの衝突事故、顔は原型を留めておらず、腕は吹き飛び、両足は複雑骨折

・・・場所は帝丹公園前。一体どんな衝突をしたらここまでひどい状態になるのかしら」

灰原はクスクス笑いながらプリントをしている

「や、やけに詳しいじゃねーか・・・」

「インターネットの記事に載ってるわよ。まあこの事故は予想外だったけど許容範囲ね。」

あと4人・・・ククク・・・」

その時の灰原の笑みはいつもオレに見せてくれるカワイイ笑顔ではなく、悪魔そのものであった

（イ、インターネットって・・・授業中にそんなもんすんなよな）

オレは配られたプリントを10分程で仕上げてしまい、かなりヒマだった。オレと同じくヒマにしているだろうか、小説を読んでいるかの灰原の方をチラッと見た。しかし

オレの予想とは違い、灰原はまだプリントと格闘していた。

（おいおい中学生の問題だぜ。おめえなら5分で解けんじゃねえのか？）

オレはかなり驚いた。しかしまた何かの薬品の研究でもしてるんだろうと思って

灰原のプリントを盗み見た。そこに書かれていたのは――――

（ゲェ！！なんだこりゃ！と、東大の過去問！！）

灰原がやっていたプリントには東大入試に出てくる数学の計算式がズラーーーーっと

およそ100問はあるものが載っていた

(な、なんで灰原だけ・・・？灰原が天才少女としてこの学校に名が届いているから

・・・

いや、頭脳はオレと対して代わらないはず。じゃあなんで・・・まさか！教師からの

イジメ！！)

オレは眉間にシワを寄せてかなり真剣に考えていた。それに気づいた灰原が

「どうしたの江戸川君？あなたにも解らない中学生の問題でもあったのかしら？」

「ほえ？」

オレは灰原の言葉が全然耳に入ってなかったので、かなり間の抜けた反応をしてしまった

「解らない問題でもあったのかしら？」

今度はかなりゆっくりと言ってくれた

「いや、そんなんじゃないんだ・・・それより灰原、そのプリントは・・・」

——キーンコンカンコン——

プリントの事を聞こうとした瞬間チャイムが鳴った。灰原は立ち上がり

「t e i m o v e r . フフ・・・残念、時間切れデス」

教室を出て行ってしまった。取り残されたオレは頭に「？」を浮かべ、

視線で灰原を見送った

次は体育か・・・

くあとがきく

こんにちわーおひさしぶりデス！天使恵あまつかめぐみでございます！
小説を書くのは楽しいですよ。みなさんも書きましょう！

2時間目（後書き）

くあとがきく

こんにちわくおひさしぶりデス！サイザーでございます！
小説を書くのは楽しいですよ。みなさんも書きましょう！

3時間目

質問攻めの灰原さん（3時間目）

3時間目は体育だ。男子はグラウンド、女子は体育館でそれぞれ授業を

受けている……が、さっきあった事故により男女混合で体育を受ける事になった。

——女子更衣室——

「ねえ哀ちゃん、先生大丈夫かな？」

同級生の歩美が俯いたまま心配そうに尋ねてきた。

「大丈夫よ。事故っていったってバイクとぶつかって腕の骨にヒビが入った

って程度なんだから」

灰原は歩美を心配させまいと、あえて真実を話さなかった。哀の言葉を聞

き、歩美はとても嬉しそうに笑った

「そうなんだ！よかったー！ー！」

（フフ……本当にいい子ね……）

哀は歩美の笑顔を見て、小学生の時からかわらないわね、など思っていた

「ねえ哀ちゃん！体育何するのかな？」

「さあね、私も体育は苦手だし、運動も得意じゃないわ」

「そうだよね！！哀ちゃん頭いいもんね！」

「……？？？？」

（今の言葉は何か関連性があるのかしら・・・）

――男子更衣室――

「おいコナン、覗きに行こうぜ」

同級生の小嶋がニヒヒと笑いながらコナンに話かける

「バーロ、仮にも探偵が犯罪に手を染めるようなことすんじゃないよ！」

コナンが制服を脱ぎながら元太を叱る

「大丈夫だって！隣の部屋に秘密の穴あけておいたからよ！」

こいこいと手招きする元太を呆れた目で見た

（まったく、灰原にばれたら何されるか・・・）

コナンは灰原に実験台にされている想像をしてしまいブルブル震えていた

「おおお！！み、見える・・・！あれは、歩美と・・・」

灰原だな」

ドキィ！！

灰原という名前が出た瞬間、

顔がみるみる赤くなっていた

（み、みてえ・・・／／／／）

「二人はなんかしゃべりながら着替えてるみたいだな。あっ！！

灰原が制服を・・・」

ドゴオオオオオン！

元太は最後まで言葉を発する事なく、男子生徒に突き飛ばされてしまった

「おい、どけよ！じゃまだ！みえねえだろ！！」

「バーカ！てめえが邪魔なんだよ！そこどきやがれ！」

「んだとコラァ！」

「まあまあみんな、順番に見ようぜ？」

「バカかてめえは！次は体育だぞ？んな時間あるわけねえだろ！」

ガヤガヤガヤ・・・

元太が空けた小さな穴に男子全員が集まり、取り合いをしている
当の元太は突き飛ばされた所が痛いのか、それともビックリしてい
るのか

口が半開きになってポカンとなっている

(可愛そうに元太・・・)

「ええーみんな解っていると思うが、2週間後には期末テストがあ
る！

テストに出す範囲は・・・」

先生が長々と話している様子をみんなダルそうに聞いている。

灰原も歩美と楽しそうに会話をし、楽しそうに笑っている

「こら灰原！吉田！先生の話を聞いてたか！」

歩美は体がビクッと反応し、灰原はゆっくりと先生の方へ視線を移
した

「今先生が説明した事をみんなにもう一度説明してみろ。」

先生はニヤッと不気味な笑いを浮かべている

歩美と灰原はスッと立って、灰原が説明した

「【バスケットボール】非常にハードな球技。冬季のスポーツとし
て誕生したので、

激しい

動きが続くしくみになっている。比較的せまいコートで5人づつ

の選手がボールを

奪い合い、

相手ゴールへシュートして得点を競う」

相変わらず説明した事以上の事を淡々と話す。歩美は「がんばって」
といわんばかり
の目を

「元太君がんばって！あと9周だよ！」

歩美も立ち止まって元太をはげます

「元太君、座っていたら走る回数が増えますよ」

光彦もその場で足踏みしながら元太をはげます

「うええええ！やだぜそんなのー！」

元太は慌てて立ち上がった

「それに比べてあの二人は・・・どんな体力してるんでしょうか」
光彦はチラッとある二人を見た

「ほんと。元太君もあの二人を見習わなきゃ！」

「うっせえ」

そう、あの二人とは・・・

「ハアハア・・・お、女にしては、なかなかやるじゃねーか・・・」
「ハアハア・・・あなたこそ、ただの推理オタクにしては、なかなかね・・・」

およそ、100m走でもしているかのようなスピードで、グラウンドを走っている

（うそだろ、灰原がこんなに足速かったなんて・・・男として負けたくねえ）

（組織にいた頃無理矢理鍛えさせられたとはいえ、さすがは男の子ね）

ヒュオオオオオオオ！

いきなり目の前から疾風が吹いた。コナンはゴミが目に入り一瞬スピードが落ち、

灰原は風のせいで体操服が・・・

「！！！！！！／／／／／／／／／／」

（ハッ！白・・・）

灰原は体操服を限界までひっぱり、座り込んでしまった。男子生徒が全員灰原を見て

いた

男子はなんだかいいもの見たような顔をしていたのでコナンは怒っていた

「まったく！最近のガキは！おい灰原・・・あと100mぐらいだぜ？立てよ。」

コナンは俯いたまま顔が赤い灰原に手を差し出した

「・・・・・・・・グス・・・・・・・・」

ダッツッッ！！

灰原は突然走り出した。コナンは手を差し出したまま呆気にとられていたが、すぐに

我に返った

（んだよ灰原のやつ、ブラジャー見たぐらいで怒りやがって・・・オレのせいじゃねーだろ？）

あとから追いかけたコナンは当然追いつけるはずもなく灰原が1位となった

「ハア・・・ハア・・・おい・・・何怒ってんだよ・・・ハア・・・ハア・・・」

俯いたまま体育座りしている灰原の肩をゆっすた

「コナン君！！女心がわかんないの！」

「いい！」

3位でゴールした歩美がコナンに対して怒りを露にしている。

「好きな男の子にお腹とかみられちゃったんだよ！傷つくに決まってるでしょお！」

（えっ・・・好きな男・・・？灰原が？灰原が好きな男おおお！！誰だよ！！）

コナンはひどく混乱していた。自分の事だとは微塵も思っていないようだ

キーンコーンカーンコーン

みんながゴールしたところにタイミングよくチャイムがなった
(灰原が好きな男ってだれなんだああああー！！！！)
コナンはまだ悩んでいるようだ

「次の授業は家庭科だね☆！」

「ええ、たしか調理実習のはずよ」

「わー！ーい！！歩美お料理だー！ーいすき！」

戻る

3時間目（後書き）

（あとがき）

こんにちわサイザーです！なんとかコナンとラブラブにしようと思っただんですが・・

・

4時間目は哀ちゃんの手料理を食べるコナン・・・という設定にしようかと思って

おります。では！お楽しみに！

4時間目

質問攻めの灰原さん（4時間目）

パンパンパン！！

「はい、今日は調理実習の日ですね！献立は自由とします。男女別でおいしい物を作ってくださいね〜！」

先生は手を叩きながら満面の笑顔で言い放つ

（ちえっ、男女別かよ）

コナンは灰原と一緒にになれる事を期待していたが、先生の言葉で期待はもろくも

崩れさった。他の男子もため息をついている者が多い

「哀ちゃん一緒にやろう！」

「ええ、よろしくね」

（はあ〜・・・歩美はいいよなあ・・・）

ひじをつきながらため息をついていると先生と目が合った

「えっと、料理を始める前にこの間授業でした事をおさらいしましょうね！」

「「「えええええええ〜！！」「」」」

早く作らせてくれといわんばかりの大反響が先生に向けられた

カリカリカリ・・・

そんな言葉を見無視するかのようには黒板に「栄養素の種類」という題名が書かれており、

「はい！灰原さん！！」

ビシッと灰原を指差して微笑む

「6つの栄養素といえぼ？」

「はぁゝ・・・」

なにやらうんざりしたようにため息をつきながらゆっくり立ち上がった

「タンパク質・魚・肉・卵などの動物性食品と、豆・豆製品の植物性食品とがある。

魚・肉・卵は脂質や無機質、ビタミンも含んでいる。大豆は、脂質やビタミンB1も

含み、とうふやみそなどに加工すると消化がよくなる」

やはり習ってもないような事を淡々と言い放つ灰原に先生は哑然となっている

（はっ！ムダムダ。灰原に質問したって必要以上の答えが返ってくるだけだぜ）

コナンは何故か勝ち誇っていた

「カルシウム…主に牛乳や乳製品などに多く含まれているが、タンパク質やビタ

ミンB2も含んでいる。また「あああ、ありがとう！もういいわよ・・・！」

両手を前に出して灰原の言葉を遮る。灰原は微笑みながら静かに席に座った

「哀ちゃん、よく質問されるね」

「ええ、そうね」

「はいっ！料理開始っ！！」

先生がそう言うのと、生徒は一斉にざわめきだした

――歩美グループ――

「哀ちゃん、何作るの？」

「そうねえ・・・材料から見ると、カレーかシチューといったところかしら」

ニンジンや玉ネギを手にとりながらメニューを考える

「歩美ね、昨日カレーだったの。だから他の料理にしよう！」

「でも私達だけで決めても」

「みんなもカレー以外の物がいいよね！！」

他の子達に元気いっぱいはなしかける

「ん？なんでもいいよ」

「私も。灰原さんの作るものって何でもおいしいし」

「あっ！それわかる！本当においしいよねえ！」

キヤイキヤイ

話がいつのまにやら灰原の話になっていた

「みんな賛成だって。だからカレー以外でお願いね！」

「え、ええ・・・じゃあこれがお昼ゴハンになるわけだし、カレーはやめて

おきましょ」

――コナングループ――

「あゝ料理なんかめんどくせえ。男は料理なんかできなくても生きていけるぜ！」

ピーマンを刻んでいた元太が突然包丁を投げ出した。

「バーロォ！オヤジくせえ事いつてんじゃねえよ」

タマネギを炒めていたコナンは元太を叱る。どうやらチャーハンを作っているらしい

「そうですよ元太君。男たるものの料理の1つも作れなくてどうするんですか！」

サラダを作っている光彦も元太を叱る。光彦もそうとうオヤジくさい・・・

「わ、わかったよ・・・やりやいいんだろ？やりやあ・・・」
ブツブツいいながらピーマンを刻むのを再開した

（灰原の奴・・・何作ってんだろ・・・）

――歩美グループ――

「わああーーーーー！！おいしそう！」

歩美はサラダを作っていた手を止め、灰原が作っている料理を見た
「哀ちゃんすごいね！どうやったらそんなおいしそうに作れるんだろ？」

「チャーハンぐらいすぐに作れるようになるわよ」

優しく微笑みながら料理を再開する。そう、灰原が作っているのはチャーハンである。コナンとは雲泥の差で・・・

――コナングループ――

「は・・・さすがは灰原さんです・・・」

「コナンのやつとは天と地ほど違うな。」

「いや・・・月とスポンですよ・・・」

「だーーーーー！！おめえらしい加減にしろよ！！」
ここまで言われてさすがに怒った

「だってよお灰原の見てみろよ。うつまそーだぜえ」

ヨダレをたらして灰原の作ったチャーハンを眺めている元太
「うっせえ！！だったらおめえらが作るか！？」

2人に指指しながら叫ぶ

「い、いやあくボク料理はちょっと・・・」

「お、おれも・・・卵焼きも作れねえし・・・」

二人はハハハと笑いながらおとなしく席についた

「つたく・・・黙って食え！」

「「はい・・・」」

（「うっ！！マズイ・・・！」）

一口食べた二人の顔はどんどん青ざめていった。もぐもぐと食べているコナンを不思議そうに見つめている。

「ん・・・あんだよ」

ギロっと二人を睨むコナンの皿はすでにカラっぽだった

「あ、いえ・・・何でもないですよ・・・」

「そ、そうそう・・・うまいぞ・・・」

冷や汗をかきながらちよびちよび食べる二人を見てコナンは不思議そうに見ている。

（チャーハンはうまくできたよな・・・？）

おそろしい味覚の持ち主である

「よお」

コナンは時間を持て余していたのでまだ昼食中の灰原の所へきた

「あら、何か用？」

灰原はコナンを見上げながらホットティーをすすっている

「おめえのチャーハン一口くれよ」

しゃがみこんで目線を合わせて口をあけた

「どうぞ」

ズズズ・・・っとコナンの前に半分残っているチャーハンの皿をもってきた

「・・・」

コナンは一気に不機嫌な顔になった。まるで百面相のようにコロコロ顔が変わっていく

「どうしたのかしら？ 一口でも二口でもどうぞご勝手に」

コナンから顔を背けて再びホットティーをすすする。

「バーロオ！ 食わせてくれて言ってんだよ！」

「あなたねえ・・・今年でいくつよ」

「14だ！ 何か悪いか！」

「ええ悪いわ！ 最悪よ！ なにが食べさせてくれよ、私はあなたのお母さんじゃないわ！」

「ああオレだってこゝんなイジワルな母親なんざいらねえよ！！」

「私だってこんなわがままな子供はほしくもないわよ！」

ますますヒートアップしていく二人のケンカを先生はただオロオロとどうしようか必死に考えている。二人に声をかけようと近寄っては考え、近寄っては考え、この繰り返しである

「大丈夫ですよ先生。あの二人のケンカはいつもの事ですから。」

「そうだぜ、ケンカの後はいつも仲良くしてっからよ！」

心配そうにしていた先生の元へ光彦と元太が励ましの言葉をかける

「そ、そうなの・・・？」

それでもまだ心配そうに二人を見つめる

「よし、オレがケンカの元を止めてくるぜ！」

「あっ！ ちよつと元太君まさか！！」

そう、元太の考えは単純明快、残っているチャーハンを全部食べてしまおうというのだ・・・

「いったっだっきまゝゝゝす！」

ガツガツガツガツ

「「ああゝゝゝゝゝゝゝ！！！！」」

コナンと灰原は同時に叫んだ。その場に固まってしまっている

「プハーハーア！ うんめえええ！！」

大満足といった感じで口元を袖で拭いている。と突然コナンに
胸倉をつかまれた

「何すんだ(するのよ)!!」

これまた二人同時に叫んだ。ここまで息がぴったりだと、逆に笑えてくる。

「い、いやだっておめえら、たかがチャーハン1個でそんな大喧嘩してるから・・・」

「たかが(だと) (ですって)!!」

もう腹話術師が男言葉と女言葉で同時にしゃべっているかのようだ

「「たかがチャーハン!されどチャーハン(だ) (よ)!!」」

「お、おめえら二人して同じことばっかいうなよ・・・」

間近で聞いている元太にしてみればかなり異様な様子である

「「(こいつが) (このひとが) 真似してる (んだ) (のよ) !!」」

シ~~~~ン・・・・・・・・

「プッ」

アハハハハハハハハハ!!!!!!!!

誰かが噴出したのを合図にするかのようにクラス全員が一斉に笑い出した

「お前ら夫婦漫才でもしてんのかよ!!」

「あゝお腹痛いゝ!」

「すげえ! 息ぴったりゝ!!」

キーンコーンカーンコーン

アハハハハハハハハハハ！！！！！！！！！！

授業の終わりを告げるチャイムの音も生徒達に微塵も聞こえちゃいない。先生も安心したかのようにクスクスと笑っている

「だああああー！！！！！！！！！！うっせええー！！！！！！！！」

顔を真っ赤にしながら友人を払いのけるコナンを見て友人達の笑い声がますますうるうかに響く。

アハハハハハハハハハハ！！！！！！！！！！

「な、何だ何だ！何をしてるんだこの教室は・・・」
授業が終わり、廊下をとうりかかった先生はとてもビックリしている様子だ

コナンくん、5時間目は音楽ですよ

戻る

4時間目（後書き）

くあとがきく

みなさんおひさしぶりです。サイザーです！
それでは、次回作をお楽しみに！！

5時間目

質問攻めの灰原さん5時間目

「まったく、いい恥かいたぜ」

ブスッと不機嫌そうな顔を貼り付け、頭の後ろで腕をくみながら廊下を

歩いてる江戸川コナンこと工藤新一は先ほどの授業でクラスの笑いに者に
なった。

「・・・・・・・・ハア」

それはこっちのセリフと言わんばかりの大きな溜息をはく茶髪の少女
灰原哀も江戸川コナン同様、クラスの笑い者になった所だ。

「おめえがさっさとチャーハンくれねえからあんな事に・・・！」

クルッと首だけ隣を歩いてる灰原に向ける

「あげたじゃない。食べなかったのはあなたよ。」

ビシッと指をコナンに向けて睨みつけた

「オレはおめえに食べさせてほしくてだなあ・・・！」

ガラガラ

コナンが教室の戸を開けると誰もいなかった。一瞬なぜかとも思っ
たが

次は音楽なのでみんな移動したのだろうという結論にたどり着いた

「うわっ！あと1分前じゃねーか！やべーぞ灰原！」

腕時計を見てビックリ仰天。音楽室は向こうの校舎の3階の

1番奥の教室なのである。走っても1分でつく距離ではない事は1度卒業

したことがあるコナンがよーく知っていた。

「ちえー、いっそサボっちゃまうか。音楽なんてこの世に必要なえー」
工藤君・・・」

コナンの独り言は灰原に遮られた。

「な、なんだよ・・・」

「あれ」

爪先立ちで窓の外を指差してる灰原の隣に駆け寄って指差している方に

視線を向けた。

「げっ！まさか・・・」

コナンがみた光景は、全校生徒が体育館に入っていく様子だった。

そういえば放送があったような、なかったような・・・コナンの記憶はあいまいだった

「まさか全校集会・・・」

キンコンカンコンコン

5時間目を告げるチャイムが鳴ってしまった

「おい、灰原急げ！！やべえぞ、完璧遅刻だ！」

コナンは灰原の腕を掴み教室のカギも閉めずに一目散に体育館へ急いだ

「コラアアアアー！！！！」

ビクッ！

結局コナンと灰原は大遅刻してしまった。当然の如く先生に怒られている

集団行動を何だと思っているんだとか、何のために集まっているんだとか

何で遅れたのかとか・・・聞いていてアクビがでそうな話を長々と・・・

第一、何で遅れたのかというのは口げんかしていたから・・・なんて事も

言えるはずもなく、コナンと灰原は全校生徒の前で説教された。

「まったく！今度遅れたら校庭走らせるぞ！！」

「はーい・・・」

心底疲れたというような顔をしてそれぞれの定位置についた。

「おい、何でいきなり集会なんだよ・・・」

コナンは後ろの光彦に小声で尋ねた

「わかりません・・・でも、何か重要な事というのは解ります」

「ああ。わざわざ授業を返上して全校生徒集めてんだ・・・何かあるぜ」

「こらあー！静かにしろー！！」

さっきコナンと灰原を叱っていた先生が手をバンバンとたたいて注目させている。

「校長先生、どうぞ・・・」

「ええっ……コホン。みなさんこんばんわ」

「こんばんわ」

ごくわずかの生徒があいさつをかえした

「ええ……みなさんに、哀しいお知らせがあります……」

しゅっしゅん……

「病院に配送された村上先生が先ほど……息を……引き取りました」

校長先生は眉間にシワを寄せてマイクを握り締めている
周りは恐ろしいほどに静かだ……

しゅん……と息一つ聞こえないような静寂である……

いや、むしろしゅん……という音が聞こえてきそうだ

しかし周りは驚きの顔でいっぱいである……

コナンと灰原も少なからず驚いている様子……

「みなさん目を閉じて下さい。黙禱もくとうをして村上先生のご冥福を祈りましょう」

全校生徒は静かに目を閉じ、村上先生の顔を思い出している。

コナンはきちんと冥福を祈り

歩美も涙ぐみながらも冥福を祈り

光彦もまだ驚きが残っているようだがきちんと祈り
元太にいたっては黙禱^{もくとう}ってなんだ？というような顔をしている
灰原に至っては……

泣いていた

黙禱が終わる頃にはその涙はもうなく、いつものクールな顔があった
だから、灰原の涙は何者も知る事は無かった。ただ一人を除いて

35

「はい注目注目！！いいか！担任の先生の指示に従って教室に戻れ
！」

生徒達は集会が終わるなりいっきにざわめいた。さっきの静寂がう
そのように
先生の指示など聞こえないざわめきだ。だからみんな勝手に教室へ
戻る。

「おい灰原」

一人廊下を歩いていた灰原にコナンは声をかけた

「何？」

「お前……泣いてたのか……？」

「な、泣いてないわよ。何？いきなり……」

少しビックリしたように聞き返した

「ここ・・・」

コナンは灰原の襟元を指差した。

「涙が落ちた跡があるぜ・・・泣いてたんだろ？」

心配するように灰原の顔を覗き込んだ。灰原は

観念したようにフフッと笑みを浮かべる

「ええ・・・まあね・・・」

「何で・・・」

「あのね江戸川君・・・私・・・」

先生達と賭けをしていたの・・・

くあとがきく

どうもおひさしぶりです！天使恵です！

この小説で、先生が亡くなってしまいう描写がありました。これは

1週間前に私の友達が自殺してしまったのです・・・

私は中学生なのですが、すごくショックでしたね・・・涙がで

てきそうでした

小説の一部は私の感じた部分もあります。それではまた・・・

戻る

5 時間目（後書き）

（あとがき）

どうもおひさしぶりです！サイザーです！

この小説で、先生が亡くなってしまいう描写がありました。これらは

1週間前に私の友達が自殺してしまったのです・・・

私は中学生なのですが、すごくショックでしたね・・・涙がでてきそうでした

小説の一部は私の感じた部分もあります。それではまた・・・

6時間目

質問攻めの灰原さん（6時間目）

「えっ・・・？」

今は6時間目。さっきの集会がクラスのざわめきの原因であるこのざわめきのせい、声が小さかったせい、コナンは灰原の言葉を聞き取れなかった。

「今・・・何て・・・」

「だから・・・先生達と賭けを・・・してたの・・・」

「意味がわかんねえよ。」

コナンは先生がまだ教室に上がってきてない事を分かっているのかいないのか、声の音量はちと大きい

「1週間前に校長先生に呼ばれて、校長室に入ったら男の人が2・3人いて

名刺を渡されたわ・・・」

スッとコナンに名刺を渡した。コナンは名刺を見て唖然となった

「マ・・・マサチューセッツ工科大学教授・・・」

「・・・そう、私の頭脳を見込んだ何人もの教授がはるばる日本まで私を

引き抜きにきたってこと・・・」

「行っちゃうのか・・・？お前・・・」

名刺を握りつぶして問う

「行くわけないじゃない・・・でも、先生達は行ってほしいでしょうね、

私が向こうへ行けば、この学校の評判はうなぎ登り・・・こない話

ないのも・・・」

灰原は哀しそうに俯いた。目にはうっすらと涙が溜まっている

「で、お前に分からないような問題をだせば、お前は向こうに行くと言った

わけか・・・」

「よくわかったわね・・・」

「まあ、こう見ても探偵だし。今までの授業の内容を思い出してみれば

簡単に想像できちまうし・・・」

「そうね。私を向こうに行かせる事ができた先生は給料が倍になるそうよ」

「けっ！教師のクズだな！」

～1週間前～

「この前の話、考えてくださいましたか？灰原哀さん」

生徒が滅多に入らない校長室。そこに校長はもろんの事

十数人の教授がグルリとソファを囲んでいる。そのソファには教授2人と灰原哀が座っていた

「アポトーシスの細胞自己破壊プログラムをテーマにした君の論文・

私達の研究所員全員が痛く感激しましてね。是非とも我々の研究チーム

に参加していただきたいんです。」

「おねがいます。」

ハハハハと西洋人特有の豪快な笑いが校長室に響いている

「お断りします」

しゅん・・・

笑いは完全に消え去ってしまった

「じゃ、失礼します」

「こ、これこれ待ちなさい灰原君！」

校長室を出ようとする灰原を大声で引き止める

「断る前に少し考えてみてはどうだね？ 悪いお話じゃないとおもいますよ？」

周りの教授達も頷いている。

「我が校としては君のような優秀な生徒を失うのは惜しいが、君の才能を伸ばすにはいい機会じゃありませんか？」

「お断りします」

即答だった

ボタン

灰原は校長室を出て行き、教室へ向かった

「校長先生・・・」

「しかたありません。本人にその気がなければ・・・」

ゴトン！！

教授の一人がふろしきに包まれた大きな正方形の物を机の上に置いた

「こ、これは？」

パラリ・・・

ふろしきを取り外された。そこには・・・

「校長先生、どうかお受け取りください」

「こ、こんな大金！！受け取れませんよ！」

そう、机の上にある金は日本円に換算するとゆうに一千万円以上

はある。校長先生の否定する声は廊下にまで響いており、教室に向かう

灰原の耳にまで届いた。

「しかたありませんなあ・・・」

教授がパチンと指を鳴らすと隣の教授が同じ正方形のふろしきを
一千万円の上にドカッと置いた

「合わせて2000万円です・・・。どうですか？これで文句はないでしょう？」

教授達はニヤニヤと不敵な笑みを浮かべてる。校長に否定する
余地は無かった・・・

「・・・解りました。彼女を必ず説得させてみせます」

「1週間」

「・・・えっ？」

「1週間以内に説得させて下さい。こちらもヒマではないのでね」

教授達はスッと立ち上がり、校長と握手を交わして校長室を出た

ボタン・・・

教授達が出て行った部屋は静かだった。校長はなだれ込むように
イスに腰掛けた。隣には教頭先生もいる

「教頭先生・・・私はどうすればいいのでしょうか・・・。これじゃあ
あまるで

生徒を金で売買している行為と同等です。かといって、学校の財政が
厳しいのも事実・・・一体どうすれば・・・」

「チャンスを与えます・・・」

校長と教頭は驚いて声のする方に視線を向けた。そこに立っていた

のは

「は、灰原君……」

校長は思わず立ち上がっていた。校長の目には救いの女神に見えたかもしれない。

「チャンスを与えます。この1週間の内1回でも私に解らない問題を出せたなら、私は躊躇なく工科大学へ行きます。」

「どうして……そんな事を……」

「私より愚かな所で学ぶもの事なんて何もないもの」

「そ、それはそうですが……」

「じゃ、失礼しました……」

パタン

校長室にはさっきの静寂が漂っている。何の物音もしない

校長先生は何か考えているのか、額に指を組んだ手をあてて

俯いている。そして……静かに口を開いた

「教頭先生……緊急職員会議の準備を……」

校長先生の声は恐ろしいほどに低く、沈んでいた

「い、今からですか!？」

そう、今は授業の真っ最中。どの先生も授業をしているだろう。

それを承知で呼べといっているのだから驚くのも無理はない

「ええ……そうですよ……」

校長の顔には悪魔の笑みが張り付いている。いつも穏やかな

校長からは考えられない表情である。

（現在）

「なるほどね・・・まさに教師とお前の生き残りを賭けたバトルロワイアルってわけね。」

「そうよ。今日で1週間目だし。私はもともとここを離れる気はなかったから・・・」

「へー・・・何で？」

「えっ？な、何でって・・・」

灰原はあっさり聞き流されると思っていたのでかなり驚いた。

「何でなんだよ。もしかして、オレと離れたくなかったとか？」

コナンは自分を指差してニカッと笑った。灰原は半分そうだったというか半分以上そうだった。だから凶星を突かれ顔が赤くなってしまった

「な、何バカな事言ってるのよ！自意識過剰にも程があるわよ！」

「ちえっ！カワイクねーの。じゃあ何でなんだよ。理由を言え理由を」

コナンはジト目を向ける

「博士にお世話になったのに、このまま恩返しもしないで出て行くのは

気が引けたのよ。」

「ほんとに？」

コナンはヒョイッと顔を覗き込んできた

「他に理由はないわ」

灰原はすかさず顔をそらした。

「でもオレは・・・」

キーンコーンカーンコーン

全ての授業の終わりを告げるチャイムが校内に響き渡る。コナンの声はチャイムに遮られ、灰原には届いていなかった。そこに先生が来た

「おーい！席につけよう！終礼を始「オレはお前が好きだよ」

ザワツ・・・

クラス中が一斉にコナンに注目した。先生も驚きを隠せないようだ。目が点になっている

「オレはお前が好きだよ。だから、行ってほしくなかった・・・本当は」

灰原も何があだか解らなくなっている。解っている事は頭の中がパニック状態だという事だけである。帰り支度をしていた手が止まった

ままピクリとも動かない。

「ゴメン・・・今まで素直になれなくて。何か・・・恥ずかしくて
／＼／

「こ、こんな所でそんな事言う方が恥ずかしいと思うけど・・・」

クラスメートや先生も大きく頷いている。先生は止めるどころかコナンのいきさつを応援しているようだ

（頑張れよ江戸川！男は当たって砕けろだ！）

もはや野次馬の一人に成り下がっている。そこで何も解っていない元太が口をはさむ

「ん？何だよ、お前ら付き合うのか？」

いかにも寝起きというような顔をして周りをキョロキョロ見てる「しっ！黙って！！今いいとこなんだから！」

歩美が元太の口を押さえる。元太はかなり苦しそうにもがいている

「もう一度言う。オレはおま「私も・・・」

繰り返して言おうとしたコナンの声を遮って灰原は呟いた

「私も・・・あなたが好き・・・です・・・」

戻る

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0114a/>

質問攻めの灰原さん

2010年10月10日12時36分発行